夕霧の落葉宮邸訪問の作法：弔問から求婚へ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1341

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

夕霧の落葉宮邸訪問の作法

――弔問から求婚へ――

倉田　実

はじめに

柏木死後の「柏木」「横笛」両巻において、夕霧の落葉宮邸（一条宮邸）訪問が三度語られている。死を自覚した柏木から、夕霧は「一条にものしたまふ宮（落葉宮）、事にふれてとぶらひきこえたまへ。心苦しきさまにて、院などにも聞こしめされたまはんを、つくろひたまへ」（柏木巻・三一七～八頁）[1]との遺言を受けていたからである。しかし、語られた三度に及ぶ訪問は夕霧において意味あいが相違しており、すべてを遺言によった弔問や落葉宮慰藉として括ることはできない。夕霧には秘められた意図があるようであり、それは訪問時の座る場所に表れている。すなわち、初回においては廂の間に招じ入れられるように仕組んでおり、二度目では自ら簀子に座り、三度目は再び廂の間になっている。来客の座る場所がどこに設けられるかは、当時の寝殿造における接客作法・訪問作法において枢要な要素であった。[2]この小論では夕霧の座る場所を焦点化しながら、三度に及ぶ落葉宮邸訪問のそれぞれを意義づけていきたい。

なお、柏木は光源氏四八歳の二月に父致仕の大臣邸で死去していた。三二、三歳であった。父邸で死去したのは、両親

の強い要望があったためで、前年の一二月末に落葉宮邸から実家に戻っており、その後の落葉宮との対面はなかった。落葉宮との結婚はその年の三月であったので、結婚生活は一年にも満たなかった。落葉宮は、母一条御息所と共に落葉宮邸で哀しみに沈むことになる。

一　初度の訪問―弔問

夕霧が落葉宮邸を訪問するのは、柏木が死去した翌月の三月になってからであり、これは弔問を表にしたものであった。落葉宮邸の寂寥を語った後、訪問の様子は次のように示されている。

御前の木立いたうけぶりて、花は時を忘れぬけしきなるをながめつつ、もの悲しく、さぶらふ人々も鈍色にやつれつつ、さびしうつれづれなる昼つ方、前駆はなやかに追ふ音してここにとまりぬる人あり。「あはれ、故殿の御けはひとこそ、うち忘れては思ひつれ」とて泣くもあり。大将殿のおはしたるなりけり。御消息聞こえ入れたまへり。例の、弁の君宰相などのおはしたる、と思しつるを、いと恥づかしげにきよらなるもてなしにて入りたまへり。

母屋の廂に御座よそひて入れたてまつる。おしなべたるやうに人々のあへしらひきこえむは、かたじけなきさまのしたまへれば、御息所ぞ対面したまへる。

（柏木巻・三二八頁）

もの寂しげな落葉宮邸は服喪中であり鈍色にやつれている。そこに「前駆はなやかに追ふ音してここにとまりぬる人」があったとされる。これが夕霧になり、「前駆はなやかに追ふ音」は、随身たちの立てる音になる。夕霧は近衛大将なので随身八人が従っていよう。随身の数は、中将・衛門督・兵衛督になると四人、少将・佐は二人とされていたので、「前駆はなやかに追ふ音」は、大将以上の官位にふさわしい。『源氏物語』では、中将時代の光源氏に、「前駆も追はせたまはず」（夕顔巻・一三五頁）、「前駆なども追はせたまはず」（末摘花巻・二七三頁）とされる用例があるが、これらは「追はせた

まはず」とした私的な微行であり、これ以外の場で中将時代に前駆がどうであったかは分からない。内大臣（頭中将）の場合は、「御前駆追ふ声のいかめしきにぞ」（乙女巻・三九頁）、「こちたく追ひののしる御前駆の声」（同・五六頁）とあり、「いかめしき」「こちたく」とされるところに威勢を誇る性格が語られていた。転じて、『蜻蛉日記』では、兼家の右大将時代になって、「前駆追ひののしる」（中巻・天禄二年・二一六頁）、「前駆よいほどに追はせてあるも」（下巻・天禄三年・二七四頁）、「前駆追ふ者、門にとまる心地す」（同・二九〇頁）などという用例が見られる。夕霧の「はなやかに」や、兼家の「追ひののしる」「よいほどに追はせ」は、近衛大将であることを指示していよう。

夕霧は、近衛大将として随人を従えて落葉宮邸に赴いたのである。柏木は衛門督であったので、衛府の同輩として、随身に「はなやかに追ふ音」をさせ、公的な弔問であることを印象づけたのである。この訪問の仕方に対して、「あはれ、故殿の御けはひとこそ、うち忘れては思ひつれ」と言って泣いた女房がいたとされる。悲しみに沈む女房は、柏木の帰宅と錯覚したわけであり、その「はなやか」さに惑わされたことになろう。

落葉宮邸に着いた夕霧は、「御消息聞こえ入れたまへり」とされている。正門のあたりで弔問目的の来訪である旨の案内を通したのであり、威儀をただしている。来訪が告げられたのは、「例の、弁の君、宰相などのおはしたる、と思しつるを」と敬語が使用されているので一条御息所になろう。柏木の弟たち、弁の君、宰相などは、これまでも弔問に訪れていたようである。一条御息所も来訪者を錯覚したのであり、この辺りの事情を『湖月抄』師説は、「上詞に、さきおふといへるは、外ざまなどに有る人の聞きたること也。ここにいへるは宮す所の思ひ給ふ心也。弁、宰相などは、さきをばおはぬ也」（『増註湖月抄』に拠る）と指摘している。

案内を通したうえで夕霧は、そのまま邸内に上がったようであり、「いと恥づかしげにきよらなるもてなしにて入りたまへり」とされている。近衛大将として美々しく振舞っており、その様子や来訪の仕方から、「母屋の廂に御座よそひて入れたてまつる」ことになる。この判断を下したのも一条御息所であり、「おしなべたるやうに人々のあへしらひきこえむは、

かたじけなきさまのしたまへれば、御息所ぞ対面したまへる」ことになる。一般客に対するような接客では失礼なので、「母屋の廂」に導き、そこに「御座」を設けて、母屋の一条御息所が御簾越しに応対するようにしたのである。

ここで「母屋の廂」という、言い方がされている。集成は「すぐ後に、（母屋の）御簾際まで出て応対する母御息所を意識してのことであろう」と指摘している。ここは、そうではなく、廂でも母屋に面した間をいうのであり、四隅にある「隅の間」でないことを指示していよう。「隅の間」は、母屋に面しない廂であった。廂に招じられる来客は、妻戸から入ってこの「隅の間」に座るわけだが、夕霧大将の公的弔問と察して、「母屋の廂に御座」を設け、賓客として待遇したことになる。廂でも格が上なのである。応接するのは邸の主人一条御息所自身であり、侍女を介さず、御簾越しに会話するのである。夕霧はこうした事態になることを企んで、随身にはなやかに前駆を追わせて訪問したと言えよう。

思い通りの居場所を確保した夕霧は、一条御息所を前にして、まず次のように話している。

いみじきことを思ひたまへ嘆く心は、さるべき人々にも越えてはべれど、限りあれば聞こえさせやる方なうて、世の常になりはべりにけり。いまはのほどにも、のたまひおくことはべりしかば、おろかならずなむ。誰ものどめ難き世なれど、後れ先だつほどのけぢめには、思ひたまへ及ばむに従ひて深き心のほどをも御覧ぜられにしがなとなん。神事などの繁きころほひ、私の心ざしにまかせて、つくづくと籠りゐはべらむも例ならぬことなりければ、立ちながら、はた、なかなかに飽かず思ひたまへらるべうてなん、日ごろを過ぐしはべりにける。大臣などの心を乱りたまふさま見聞きはべるにつけても、親子の道の闇をばさるものにて、かかる御仲らひの、深く思ひとどめたまひけんほどを推しはかりきこえさするに、いと尽きせずなん。

（柏木巻・三二八～九頁）

訪問の表向きの理由は弔問なので、夕霧の言葉は弔意で一貫している。しかし、すでにここには隠された意図があろう。それは、柏木の遺言を表に立てて、今後の落葉宮邸訪問を口実化することであり、すでに落葉宮に対する興味が兆していよう。夕霧は柏木から「のたまひおくこと」、すなわち、遺言があったことを明確に述べている。来訪が遅れたことに対し

て、「限りあれば聞こえさせやる方なうて、世の常になりはべりにけり」というように、自分は身内ではなく、定まった作法があるのでお慰めするすべもなく、これまでは世間並みのお悔やみになってしまいましたと言い訳をしながら、遺言を持ち出しているのである。だから、自分の弔意は、おろそかな気持ちでないことの強調となる。そして、言葉を重ねたうえで、「かかる御仲らひの、深く思ひとどめたまひけんほどを推しはかりきこえさするに、いと尽きせずなん」と会話をひとまず閉じている。夫婦の間柄に、柏木がどんなに深く心を残していたかを遺言からお察しすると、まったく尽きぬ思いがいたしますというのであり、落葉宮に同情を寄せるのである。そして、これは今後の落葉宮に対する後見を表明するものとなる。

夕霧は、遺言を表に立てて自身の落葉宮慰藉と後見を正当化しようとしている。その言葉は弔意で一貫しているので、一条御息所もしみじみとこれまでの経緯を述懐することになる。桐壺の更衣を亡くした母の述懐に似たその実際は引用を省略するが、一条御息所が柏木の遺言を確認する部分だけは見ておきたい。

いとうれしう浅からぬ御とぶらひのたびたびになりはべるめるを、あり難うも、と聞こえはべるも、さらばかの御契りありけるにこそはと、思ふやうにしも見えざりし御心ばへなれど、いまはとてこれかれにつけおきたまひける御遺言のあはれなるになん、うきにもうれしき瀬はまじりはべりける。（柏木巻・三三一頁）

一条御息所は、夕霧の弔問は「かの御契り」によること、すなわち、柏木と夕霧との間にあった落葉宮に対する後見の約束の実行であることを確認している。生前の柏木には落葉宮に対する気持ちが窺われなかったが、「これかれにつけおきたまひける御遺言」があったことを思うと、死の悲しみはそれとして、「うれしき瀬」はあるものだと得心もしている。柏木は、「誰にも、この宮の御ことを聞こえつけたまふ」（柏木巻・三一一頁）ことをしていた。弟の弁の君や宰相にも落葉宮後見を委託していたわけだが、夕霧もその人数に入っていることを一条御息所は知ったわけである。夕霧の弔問は、一条御息所のこの言葉で目的を果たしたことになる。柏木の遺言を確認することで、落葉宮慰藉を口実とした訪問が今後に

可能となる。

夕霧は柏木追慕の言葉を残して辞去している。その様子に侍女たちは、「もの悲しさも少し紛れて見出だしたてまつる」ことになる。侍女たちの今後の期待を暗示していよう。辞去に際して、夕霧は一条御息所と贈答歌を交わしているが、ここに落葉宮への思いがすでに表明されている。

御前近き桜のいとおもしろきを、「今年ばかりは」とうちおぼゆるも、いまいましき筋なりければ、「あひ見むことは」と口ずさびて、

時しあればかはらぬ色ににほひけり片枝枯れにし宿の桜も

わざとならず誦じなして立ちたまふに、いととう、

この春は柳のめにぞ玉はぬく咲き散る花のゆくへ知らねば

と聞こえたまふ。いと深きよしにはあらねど、いまめかしうかどありとは言はれたまひし更衣なりけり。げにめやすきほどの用意なめりと見たまふ。

（柏木巻・三三二～三頁）

夕霧の心にかすめた「今年ばかりは」の歌句は、

深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け

（古今・哀傷・八三二・上野岑雄）

であり、「墨染に咲け」に続くことから、新全集が指摘するように落葉宮の出家姿を連想させたのであろう。だからこの歌句は胸に秘めて、代わりに「あひ見むことは」と口ずさんでいる。これは、

春ごとに花の盛りはありなめど逢ひ見むことは命なりけり

（古今・春下・九七）

に拠っており、次のような読み方がされていた。

夕霧の下心、落葉をねんずるによりて、あひみんことといへり。あはんといふかたばかりにとる也。

（『細流抄』源氏物語古注集成に拠る）

落葉宮への思いは、口ずさまれた引歌に託されていよう。そして、それは贈歌にも認められる。「かはらぬ色ににほひけり」は、落葉宮を指示しており、夕霧は、その「色」に興味を示したのである。こうした贈歌に対して、「いまめかしうかどありとは言はれたまひし更衣」である一条御息所は、直接応じることはせず、哀傷に沈む悲しみを表出することに留めている。しかし、夕霧にはこれで十分なのである。

夕霧は近衛大将としての威儀をただして弔問に訪れた。そのために「母屋の廂」での一条御息所との対面が可能であった。夕霧の隠された目的は、柏木の遺言を盾にして、今後の落葉宮後見を口実化することであった。その目的は、直接の対面・対話によって十分に達せられたことになる。

二　二度目の訪問―求婚の「居初め」

夕霧の落葉宮邸訪問は、翌月にもなされているが、語られていない訪問もあったようである。便宜上、二度目の訪問として扱っておきたい。

かの一条宮にも、常にとぶらひきこえたまふ。四月ばかりの空は、そこはかとなう心地よげに、一つ色なる四方の梢もをかしう見えわたるを、もの思ふ宿は、よろづの事につけて静かに心細く暮らしかねたまふに、例の、渡りたまへり。庭もやうやう青み出づる若草見えわたり、ここかしこの砂子薄き物の隠れの方に、蓬も所えがほなり。前栽に心入れてつくろひたまひしも、心にまかせて茂りあひ、一叢薄も頼もしげにひろごりて、虫の音添はん秋思ひやらるるより、いとものあはれに露けくて、分け入りたまふ。伊予簾かけわたして、鈍色の几帳の更衣したる透影涼しげに見えて、よき童のこまやかに鈍ばめる汗衫のつま、頭つきなどほの見えたる、をかしけれど、なほ目おどろかるる色なりかし。

（柏木巻・三三六～七頁）

夕霧の訪問に対して、「例の、渡りたまへり」とされている。「例の」とあるので、これ以前にも訪問はあったわけである。訪問は何度かに及んでいたせいもあるのか、夕霧は、中門から南庭にそのまま入ったようである。初夏なので、「庭もやうやう青み出づる若草」が見渡される中を「分け入りたまふ」ことになる。中門廊を通って対の屋に行くのではなく、南庭に入る仕方に意味があるのかも知れない。

語られるこの二度目の訪問で、夕霧は自ら簀子に座っているが、これには重要な意味があった。

今日は、簀子にゐたまへば、褥さし出でたり。いと軽らかなる御座なりとて、例の、御息所おどろかしきこゆれど、このごろ悩ましとて寄り臥したまへり。

（柏木巻・三三七頁）

夕霧自ら簀子に座ったので、中から褥が差し出されている。簀子は「いと軽らかなる御座」であるとして、女房は、一条御息所に注進に及んでいるが、「このごろ悩まし」として応対に出て来ようとしない。出て来なくても夕霧は簀子がいいのである。

とかく聞こえ紛らはすほど、御前の木立ども、思ふことなげなるけしきを見たまふも、いとものあはれなり。柏木と楓との、ものよりけに若やかなる色して枝さしかはしたるを、「いかなる契りにか、末あへる頼もしさよ」などのたまひて、忍びやかにさし寄りて、

「ことならばならしの枝にならさなむ葉守の神のゆるしありきと

御簾の外の隔てあるほどこそ、恨めしけれ」とて、長押に寄りゐたまへり。「なよび姿、はた、いといたうたをやぎけるをや」と、これかれつきしろふ。この御あへしらひ聞こゆる少将の君といふ人して、

「かしは木に葉守の神はまさずとも人ならすべき宿のこずゑか

うちつけなる御言の葉になん、浅う思ひたまへなりぬる」と聞こゆれば、げにと思すにすこしほほ笑みたまひぬ。

（柏木巻・三三七～八頁）

女房が座を取り持っている間、前栽の柏木と楓の枝が交差しているのを見た夕霧は、連理の枝に見立てて、歌を詠んでいる。この歌の意味は明白であり、「葉守の神」柏木の許しがあったので、同じことなら落葉宮と連理の枝のように親しくしていただきたいと求愛したのである。落葉宮に向けての歌となる。遺言は、都合よく利用され、落葉宮思慕を理由づけるものとなっている。

夕霧は自ら簀子に座ったにもかかわらず、「御簾の外の隔てあるほどこそ、恨めしけれ」と恨み言を言い、「長押に寄り」かかって座っている。この姿勢は、厚かましさを示すのではなく、求愛のポーズであろう。野の宮に訪れた光源氏は、「御簾ばかりはひき着て、長押におしかかりてゐたまへり」（賢木巻・八八頁）とされ、中の君のもとに訪れた薫は「長押に寄りかかりておはすれば」（宿木巻・三九三頁）とされている。求愛のポーズなのであり、それを女房は「なよび姿（あだな姿）」と見ている。

夕霧の歌に対しては、返歌がされていて、柏木は不在でも誰もこの宿に親しくはお近づけできませんと拒絶されている。この返歌の詠者に対して、古注以来、一条御息所か落葉宮かで説が分かれている。現在では、新全集・新大系は落葉宮とし、集成は一条御息所の歌としている。また、新説では「内親王の意を体して、という建前での（女房の）代作である。そもそも一般の、結婚前提の求愛にしてからが、姫君は最初から贈答に応じたりしない」とする見解がある。[3] この新説は興味深いが、落葉宮ではなく、その母の代作となろうか。そうなると、母一条御息所の歌として詠まれていたと理解しても構わなくなる。求愛の歌に、直接姫君が応答しないことは確かである。況や、御簾越しでも最初から対面できるわけはない。一条御息所側では、夕霧の歌を「うちつけなる御言の葉」としているので、求愛の歌とみたのは間違いなく、拒絶の歌を返したのである。

この贈答歌の後、「御息所ゐざり出でたまふけはひすれば、やをらゐなほりたまひぬ」とされ、対話に及んでいる。引用は省略するが、この対話は弔問のお礼と慰謝の言葉だけである。夕霧の落葉宮の「心ばせ」を思う心内語が示された後、

次のように言葉を残して夕霧は辞去している。

「今は、なほ、昔に思しなずらへて、うとからずもてなさせたまへ」など、わざと懸想びてはあらねど、ねむごろに気色ばみて聞こえたまふ。直衣姿いとあざやかにて、丈だちもものしうそぞろかにぞ見えたまひける。

（柏木巻・三三九～四〇頁）

辞去の言葉は、落葉宮との交誼を願うだけでなく、十分に気のあることが仄めかされたようである。夕霧の今回の訪問は、弔問の意も当然あるが、それよりも落葉宮に求愛の贈歌をし、その意志を表明することであった。語られた内容で主要なことは、贈答歌だけのようである。二度目の訪問の目的は、これで達せられていたのである。一度目の訪問は、あくまでも正式な弔問であった。夕霧は、改めて求婚者として、初めて簀子に「居初め（座り初め）」をしたのであった。

三　藤原遠度の「居初め」――『蜻蛉日記』

「居初め」とは、私見になるが、求婚者が初めて訪問した際、簀子に座って求婚の意を直接表明することである。その例が『蜻蛉日記』下巻で、道綱母の養女に求婚した右馬頭遠度の作法に認められるのである。前著[4]で指摘したことになるが、ここでも確認しておきたい。遠度の「居初め」となる初度の道綱母邸訪問は、次のように記されていた。

ついたち七八日のほどの昼つかた、「右馬頭おはしたり」と言ふ。「あなかま。ここになしと答へよ。もの言はむとあらむに、まだしきに便なし」など言ふほどに入りて、あらはなる籬の前に立ちやすらふ。…からうして起き出でて、ここには人もなきよし言ふ。風の心あわたたしさに、格子を、みなかねてより下ろしたるほどなれば、なにごと言ふもよろしきなりけり。しひて簀子に上りて、「今日よき日なり。円座かいたまへ。居初めむ」などばかり語らひて、「いとかひなきわざかな」とうち嘆きて帰りぬ。

（蜻蛉日記・下巻・三二八～三〇頁）

求婚の許諾をするのは道綱母であり、養女の成長ぶりからして時期尚早との思いがあって、これ以前に拒否の言葉は遠度に伝えてあった。しかし、兼家からの許しを得ていた遠度は、初度の訪問をあえてしたのであった。道綱母は居留守を使って会うことをしないが、遠度は強引に簀子に上がって円座を要求して座り、「居初めむ」と言っている。被求婚者宅で座り初めをしようと言うのである。そして、遠度はあっさりと帰っている。

この遠度のやり方は、求婚者の初度の訪問における作法であったと思われる。そして、求婚の相手に会うことができないのも、慣行ではなかったかと判断される。道綱母の場合は、自身が許諾を与える立場にあったので、居留守を使ったのである。また、前著では指摘していないが、初度の訪問時は、南庭から建物に上がるものではないかとも思われる。遠度は、「籬の前に立ちやすらふ」とされており、これは南庭を意味していよう。夕霧も南庭から簀子に上がっていた。初度の訪問は、南庭から簀子に上がって座ることが作法の一環ではなかったかと推定されるのである。これが、「居初め」であった。

夕霧も、弔問慰藉に見せかけて、「居初め」を演じたのではなかったか。だから、簀子に座る必要があった。弔問としての「公式訪問が終わっている」[5]からではあるまい。公式訪問が一度に限られることはないと思われる。夕霧の訪問は、先に引用したように、「例の、渡りたまへり」とされ、これまでも重ねられていた。また、私人としての訪問を意味するのでもあるまい。私人であっても、大将夕霧ならば廂の間に入れるはずである。しかし、夕霧は自ら今回は簀子に座っている。「今日は、簀子にゐたまへば」であり、それまでは廂に通されていたのであろう。そして、簀子から落葉宮への求愛の贈歌をしたのであった。求婚者初度の訪問を仮託しているのである。初度の訪問では、求婚する相手に会うことはできない。また、直接の返歌も得られない。夕霧は、それが分かっているので、落葉宮との対面を望むこともなく、一条御息所、あるいは、その代作の拒絶の歌を得るだけで、それ以上の要求はしていない。交誼以上の意志を表明してあっさりと辞去した感じである。夕霧は、「居初め」ができたことで安心し、辞去したことになる。

夕霧の辞去する姿を見た女房たちは、柏木と夕霧を比較しながら、「同じうは、かやうにても出で入りたまはましかば」（柏木巻・三四〇頁）と噂していた。人少なな邸宅の寂しさを感じる女房たちは、夕霧の婿としての通いを願っているのであり、その願いのきっかけは「居初め」の作法を見出していたからかも知れない。

求婚者は「居初め」が叶うと、再度の訪問が可能になるようであり、遠度もそのようにしていた。再度になると廂に入れるのが慣行となるようであり、道綱母も躊躇なくそのようにしていた。初度の訪問があって二、三日後のことである。

助（右馬助道綱）に「もの聞こえぬ」と言ひがてら、暮にものしたり。いかがはせむとて、格子二間ばかり上げて、簀子に灯ともして、廂にものしたり。助、対面して、「早く」とて、縁に上りぬ。妻戸をひき開けて、「これより」と言ふめれば、歩み寄るもの、またたちのきて、「まづ御消息聞こえさせたまへかし」としのびやかに言ふなれば、入りて、「さなむ」とものするに、「思しよらむところに聞こえよかし」など言へば、すこしうち笑ひて、よきほどにうちそよめき入りぬ。

（蜻蛉日記・下巻・三三〇～三頁）

遠度は、夕暮に来訪している。道綱母は、簀子に灯台を置き、廂に御座を設けている。道綱は、妻戸を開けて廂に招じ入れようとすると、遠度は入りかけたもののすぐに簀子に戻り、「まづ御消息聞こえさせたまへかし」と道綱に依頼している。遠度は、道綱母の許しを得てから廂に入ろうとしているのであり、道綱は安易に導いてしまったのである。許しを得て廂に入るのが作法なのであり、再度の訪問で可能なのである。夕霧もまた廂に通されることになる。しかし、次の訪問が語られるのは、翌年の秋であった。

四　三度目の訪問―求婚者再度の訪問

「横笛」巻で語られる三度目の訪問は、先の初夏から翌年の秋になっていた。求婚ということからすると間延びした時間

の経過になる。夕霧の居初めは、ここからすると、あくまでも仮託されたものとなろう。しかし、夕霧としては手順を踏んだことになる。夕霧は、「夕霧」巻で、実はないのに既成事実があったかのように装って落葉宮と契りを交わすことになる。その先蹤のような形が居初めを演じたことではなかったか。

夕霧には、三度目になる以前にも語られていない訪問があったようである。その一つが求婚者としての再度の訪問を仮託したものであった可能性があろう。しかし、落葉宮の再婚を目途とすると、柏木の一周忌以上の年月が必要とされ[6]、語ることは避けられたのかも知れない。三度目の訪問は次のものであり、ここに求婚者再度の訪問も託されていると考えておきたい。皇女の再婚となると、それなりの時間の経過は必要であろう。

秋の夕のものあはれなるに、一条宮を思ひやりきこえたまひて渡りたまへり。うちとけしめやかに御琴どもなど弾きたまふほどなるべし。深くもえとりやらで、やがてその南の廂に入れたてまつりたまへり。端つ方なりける人のゐざり入りつるけはひどもしるく、衣の音なひも、おほかたの匂ひ香ばしく、心にくきほどなり。例の、御息所対面したまひて、昔の物語ども聞こえかはしたまふ。

（横笛巻・三五二頁）

夕霧は、「秋の夕」に訪問している。廂では女房たちが合奏していたのに、すんなりと夕霧を「南の廂に入れ」ている。すでに夕霧の居場所は廂になっている。廂であることは、この後の琴の合奏を語るうえで必要な場となるが、一条御息所側との親密さが確保されていたことの証となろう。しかし、対面するのは、例の通りまだ一条御息所である。こうした場合、姫君に代わって母が応接するのであり、姫君自身が多く話をすることはあり得ない。

昔話に興じ、柏木の魂がこもり、落葉宮の人香も染みた遺愛の和琴を夕霧が弾奏し、一条御息所が落葉宮の琴の技量を話題にするに及んで、しみじみとした情趣を醸したようである。廂に座る親密さは、柏木を追憶することにおいて心情の同調をもたらしている。

やがて月も出て、比翼の鳥を連想させる雁が飛ぶと、落葉宮も柏木を追想して箏の琴を弾奏することになる。一度目の

訪問時には、「常に弾きたまひし琵琶和琴などの緒もとり放ちやつされて音をたてぬも、いと埋れいたきわざなりや」（柏木巻・三二八頁）とされていたが、一周忌もすでに済み、秋のもの寂しげな夕暮の風情が弾奏を誘うのであろう。

月さし出でて曇りなき空に、羽翼うちかはす雁がねも列を離れぬ、うらやましく聞きたまふらんかし。風肌寒く、ものあはれなるにさそはれて、箏の琴をいとほのかに掻き鳴らしたまへるも奥深き声なるに、いとど心とまりはてて、なかなかに思ほゆれば、琵琶をとり寄せて、いとなつかしき音に想夫恋を弾きたまふ。「思ひおよび顔なるはかたはらいたけれど、これは言問はせたまふべくや」とて、切に簾の内をそそのかしきこえたまへど、ましてつつましきさし答へなれば、宮はただものをのみあはれと思しつづけたるに、

言に出でていはぬもいふにまさるとは人に恥ぢたるけしきをぞ見る

と聞こえたまふに、ただ末つ方をいささか弾きたまふ。

ふかき夜のあはればかりは聞きわけどことよりほかにえやは言ひける

飽かずをかしきほどに、さるおほどかなる物の音がらに、古き人の心しめて弾き伝へける、同じ調べのものといへど、あはれに心すごきものの、かたはしを掻き鳴らしてやみたまひぬれば、恨めしきまでおぼゆれど、

（横笛巻・三五四～五頁）

落葉宮の弾奏に心惹かれた夕霧は、自ら琵琶を取り寄せて想夫恋を弾き、落葉宮も贈歌でそそのかされて合わせることになる。「この合奏は言うなれば一組の男女が柏木追憶の共同作業を口実に、心を融合させた瞬間」[7]であったかも知れない。だから、夕霧は後に光源氏にこの一件を報告することになる。まず、この報告を聞いた光源氏の反応を見ておきたい。光源氏は、次のように述べている。

かの想夫恋の心ばへは、げに、いにしへの例にもひき出でつべかりけるをりながら、女は、なほ人の心移るばかりのゆゑよしをも、おぼろけにては漏らすまじうこそありけれ、と思ひ知らるる事どもこそ多かれ。

（横笛巻・三六六頁）

光源氏は、女性が想夫恋を弾くのは、「人の心移るばかりのゆゑよし」を漏らすことになるので、弾くべきではなかったとしている。同じことは、はるか以前にも言われており、玉鬘に弾奏を勧めながら光源氏は、「いで弾きたまへ。才は人になむ恥ぢぬ。想夫恋ばかりこそ、心の中に思ひて、紛らはす人もありけめ、面なくて、かれこれに合はせつるなむよき」（常夏巻・一三三頁）と言っていた。想夫恋だけは心中に秘めて、それ以外の曲を合奏するのがいいのですと教えたのである。想夫恋は、夫以外と合奏するべき曲ではなかったのである。それなのに、夕霧は強要していたのである。

その強要は、有無を言わせない策略的な贈歌でなされていた。落葉宮は言葉を交わそうともしないので、夕霧は、言葉に出さないのは、言う以上に深い思いがあるからだと、あなたのご様子から判断されますとしたのである。これでは応答せざるを得ない。新全集が指摘するように、これは「応答しなければ「いはぬもいふにまさる」という夕霧の言葉を容認したことになるので、否定するために琴を弾いた」ことになろう。そして、返歌で哀切に切り返すことになる。

落葉宮は、少しだけ掻き鳴らしただけで止めてしまうが、夕霧は恨めしく思うものの、それ以上の強要はせず、辞去している。次は、先の引用部の続きである。

「すきずきしさを、さまざまに弾き出でても御覧ぜられぬるかな。秋の夜ふかしはべらんも昔の咎めや、と憚りてなむ、まかではべりぬべかめる。また、ことさらに心してなむさぶらふべきを、この御琴どもの調べ変へず待たせたまはんや。ひき違ふることもはべりぬべき世なれば、うしろめたくこそ」など、まほにはあらねど、うちにほはしおきて出でたまふ。

（横笛巻・三五六頁）

夕霧はこれ以上弾奏し、夜を更かしては、亡き柏木のお叱り（昔の咎め）を受けるかも知れないので、辞去いたしますと言っている。それなりの自制はあるわけだが、「この御琴どもの調べ変へず待たせたまはんや」は、すでに求愛の言葉にもなろう。

廂の間に招じ入れられている夕霧としては、ほんのわずかでも落葉宮と想夫恋を合奏し、歌の贈答を交わせたことで満足なのである。求婚者再度の来訪以上の成果を得たことは確かである。退出した方がいいのであり、まだ、恋情を実際化するには尚早なのであろう。この悠長さはまめ人の特性のようであり、契りを交わすのは、翌年まで待たねばならなかった。

おわりに

夕霧の三度に及ぶ落葉宮邸訪問のありようを、夕霧の居場所から意義づけてみた。初回は、弔問を表に立てて、今後の訪問を期するものであった。それには、重々しく、正式な弔問であることを印象づける必要があり、廂の間に通されて、直接の会話となることができていた。二度目は、落葉宮への傾斜がより進み、求婚者初度の訪問を仮託すべく、自ら簀子に座り、居初めを演じたのであった。三度目は、月日の経過が大きいものの、あたかも再度の来訪、あるいは、それ以上の成果をあげることができた。これは、廂の間に招じられたことで可能であった。そうでなければ、夕暮の合奏はできないであろう。

訪問者が、どこに招じられるかは、その人の身分立場や親密度に拠って変わってくる。夕霧の訪問において、廂・簀子・廂と居場所が変わっていたことを、求婚作法から説明を試みた次第である。

注

（1）本文の引用は、他の文学作品とともに新全集に拠る。
（2）この点に対しては、小林美和子氏「「住空間」と恋愛の言語表現」（『王朝の表現と文化』笠間書院、一九九九年四月）がある。
（3）後藤祥子氏『源氏物語の鑑賞と基礎知識　柏木』（至文堂、二〇〇一年三月）の一八三頁鑑賞欄。
（4）拙著『蜻蛉日記の養女迎え』（新典社、二〇〇六年九月）
（5）後藤祥子氏、注（3）の一七九頁鑑賞欄。
（6）工藤重矩氏「倫理・道徳」（『講座源氏物語研究　第二巻』おうふう、二〇〇六年一二月）は、再婚は一周忌を過ぎてからとする藤原長家の事例などを論じている。
（7）宮川葉子氏「落葉宮」（『源氏物語講座　第二巻』勉誠社、一九九一年九月）